

群馬県

小学校英語活動Q&A集

平成23年度から
小学校での英語活動が
全面実施となります。

楽しみながら
小学校英語活動を
やってみませんか

子どもたちは
英語活動を
楽しみにしています

子どもたちが
ワクワクするような
授業をしてみませんか

平成20年3月

群馬県教育委員会

はじめに

平成20年3月に告示された新学習指導要領において、これまで主に「総合的な学習の時間」を中心に多くの小学校で取り組まれてきた英語活動が、「外国語活動」として、第5・6学年に、週1時間程度位置付けられることとなりました。

新学習指導要領に基づく教育課程の全面実施は平成23年度からの予定ですが、平成21年度からの移行期において、英語活動の実施については各学校の裁量によるとしながらも、実施に積極的に取り組むよう努めることが期待されます。そこで、各学校が準備を進める上での参考資料として、「群馬県小学校英語活動Q&A集」を作成しました。

ここに掲載されているQ&Aは、新学習指導要領の内容を踏まえながら、「群馬県小学校英語活動モデル地域推進事業」、及び「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」の実践や協議を通して明らかになった基本的な確認事項をまとめたものです。本資料や、別に配布される「群馬県小学校英語活動モデル地域推進事業実践概要報告書」等を参考にしながら、各小学校におけるこれまでの成果と課題を踏まえ、英語活動の一層の充実・改善に向けた取組を進めていただくことを願っています。

*新学習指導要領では、「外国語活動」という名称となりますが、具体的には「英語活動」を実施することとなりますので、本資料では、「英語活動」という名称を用いて説明します。

☆英語活動の意義やねらいについて☆



1 小学校で英語活動を行う意義は何ですか。



英語活動は、小学生のもつ柔軟な適応力や、新しいことを学ぶことへの新鮮な感性を生かして、英語という外国語を使って様々な体験をする活動です。このような活動を通して、英語に慣れ親しませることはもとより、日本語と異なる言語を使ってもコミュニケーションできる楽しさを実感させ、人とかかわり合うことのおよさや大切さを再認識させることができる点で、大いに意義ある学習といえます。



2 新学習指導要領における小学校英語活動の目標は何ですか。



新学習指導要領では、外国語活動の目標として、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と示されています。



3 英語活動を通して、具体的に児童のどのような変容が期待されるのですか。



英語活動を通して、英語に触れることは楽しいという思いを抱きながら、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむとともに、教員や外国語指導助手（ALT）、クラスの友達と積極的にかかわりながら、自分自身や他の人のことを尊重し、大切にすることの重要性に気付いていくことが期待されます。また、外国の言葉や文化に触れることによって、日本語や日本の文化との違いや共通点、さまざまな習慣やものの考え方などにも関心をもち、それらを尊重しようとする態度が育つことも期待されます。



4 英語活動は、中学校の英語学習にどのように結び付くのですか。



中学校の英語科では、英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養うことをねらいとします。小学校段階で英語に触れたり、体験したりする機会を提供することにより、英語を聞くことや話すことに慣れ親しませ、英語学習への意欲を高めることで、中・高等学校において、より効果的にコミュニケーション能力を育成することにつながっていきます。

☆英語活動の活動内容について☆

5 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するためには、どのような活動を行うのですか。

A… 英語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、①英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること、②積極的に英語を聞いたり、話したりすること、③英語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること、などをねらいとした活動を行います。

6 言語や文化について体験的に理解を深めるためには、どのような活動を行うのですか。

A… 日本と外国の言語や文化について、体験的に理解を深めることができるよう、①英語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと、②日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと、③異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること、などをねらいとした活動を行います。

7 Q5とQ6の活動は、それぞれ別々の活動として行うのですか。

A… 言語や文化に関する指導については、主に、Q5の活動に取り組む中で関連して扱うようにすることで、体験的に理解が深まるようにします。その際、言語や文化についての指導内容が必要以上に細部にわたったり、形式的になったりしないように留意することが大切です。

8 英語を学ぶことが国語力の向上に結び付くとはどういうことなのか。

A… 日本語とは異なる英語の音声や基本的な表現に慣れ親しませることで、言葉の大切さや豊かさ等に気付かせたり、言語そのものに対する関心を高めたりすることができます。言葉に敏感になり、それを尊重する態度を身に付けることは、国語力の向上にも結び付くといえます。

9 効果的な活動内容を設定するために留意することは何ですか。

A… 日常の児童の実態をよく観察し、興味・関心の高い話題や、発達の段階に応じた知的好奇心を喚起するような活動を取り入れるように努めることが大切です。国語科、音楽科、図画工作科などの他教科等で児童が学習したことを活用するなどの工夫により、指導の効果が高まることも期待できます。

10 具体的にはどのような活動を設定したらよいのですか。

A… 英語でのコミュニケーションを体験させる際には、児童の発達の段階を考慮しながら、身近なコミュニケーションの場面を設定することが大切です。英語特有の表現がよく使われる場面としては、あいさつ・自己紹介・買い物・食事・道案内などが挙げられます。また、児童の身近な暮らしにかかわる場面としては、家庭での生活・学校での学習や活動・地域の行事・子どもの遊びなどを取り上げるとよいでしょう。

☆新学習指導要領に基づく各学年の目標設定と指導計画の作成について☆

11 第5・6学年の目標は、新学習指導要領にそれぞれ示されているのですか。

A… 各学年の目標は、児童や地域の実態に応じて、各学校が適切に定めることとなります。ただし、あまり活動内容等を学年毎に厳密に区別せず、必要に応じて繰り返し体験させながら、2年間を通して、総合的に英語活動の目標の達成を図るようにしましょう。

12 児童の学習段階を考慮すると、第5学年ではどのような配慮が必要ですか。

A… 英語を初めて学習することに配慮して、児童に身近で基本的な表現を使いながら、英語に慣れ親しむ活動や児童の日常生活や学校生活にかかわる活動を中心に、友達とのかかわりを大切にした体験的なコミュニケーション活動を行うようにするとよいでしょう。

13

児童の学習段階を考慮すると、第6学年ではどのような配慮が必要ですか。

A

第5学年の学習を基礎として、友達とのかかわりを大切にしながら、児童の日常生活や学校生活に加え、国際理解にかかわる交流等を含んだ体験的なコミュニケーション活動を行うようにするとよいでしょう。

14

第4学年以下の英語活動はどのように実施するのですか。

A

新学習指導要領では、第5学年から週1時間程度の英語活動をスタートし、2年間で小学校英語活動のねらいを達成することが期待されていますので、必ずしもすべての小学校において、第4学年以下で英語活動を実施する必要はありません。

ただし、低・中学年において、楽しく英語に触れる活動を取り入れたり、ALT等との交流の機会をもったりすることで、第5学年からの英語活動がより効果的なものになる可能性はあります。校内で共通理解を図りながら、児童の負担加重にならない範囲で、年間を通じて計画的に英語活動を実施してもよいでしょう。

15

第3・4学年では、総合的な学習の時間で英語活動を実施してよいのですか。

A

新学習指導要領では、総合的な学習の時間の改善の具体的事項として、「小学校において、国際理解に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること。」とされています。総合的な学習の時間に英語活動を実施する場合には、このことを踏まえた適切な活動となるよう、十分な検討を行う必要があります。

☆英語活動の指導者について☆

16

英語活動の指導計画は主に誰が作成するのですか。

A

各学校の指導計画は、学級担任や、校内の英語活動を担当する教員などを中心に作成します。一部の教員に負担加重にならないように協力し合いながら、教材・教具や指導内容の共有化を図りましょう。文部科学省から配布予定の「英語ノート（仮称）」や、教師用の指導資料も有効に活用してください。

17

英語活動の授業は主に誰が担当するのですか。

A

毎週1時間の授業については、基本的に学級担任が中心となって担当することとなりますが、校内の英語活動の担当教員がTTで加わったり、中心となって指導に当たったりすることも可能です。また、地域の実態に応じて、外国語指導助手（ALT）や、英語に堪能な地域人材の協力を得ながら英語活動を進めていくことも効果的です。

18

なぜ担任が中心となって英語活動を実施するのですか。

A

クラスの児童が、遊びや日常の話題を含めて、今何に興味や関心をもっているのか。様々な文化や習慣、英語についてどんな知識をもっており、何を知りたいと願っているのか。学習を進める上では、どんなところにつまずきやすいのか。これらを的確に把握しながら、楽しく、そして子どもの知的好奇心を満足させるような授業づくりを実現するには、クラスの児童をよく知る学級担任が中心となって英語活動を実施することが効果的です。

19

英語を教えた経験がなく、英語力にも自信がないのですが、大丈夫ですか。

A

英語活動に取り組む際には、「子どもと共に学ぶ姿勢」をもつことも大切です。ALTを迎えたときなど、教員自身が、外国人に対して気後れすることなく、身振りや表情を交えながら楽しくかかわれたという実感をもつことが、英語でコミュニケーションを図る楽しさを子どもたちに伝える原動力となります。子どもと共に新しいことを学ぶ楽しさを味わえる絶好の機会ととらえてはどうでしょうか。

また、音声教材を積極的に活用することができれば、教員自身の英語の発音の善し悪しには、それほど神経質になる必要もありません。

20

学級担任は、どの程度の英語力を身に付ける必要があるのですか。



中学校の教科書で用いられる程度の英語で十分ですが、それでもほとんど英語に触れる機会のなかった小学校の教員にとっては、戸惑いもあるでしょう。しかし、英語活動の必修化を機会に、児童と一緒に楽しみながら少しでも自分の英語力を向上させようと努力する姿勢をもつことは素晴らしいことです。

英語力向上のための自主研修等に取り組む場合、一般的な英会話力の伸長を目指すよりも、①理解可能なやさしい英語の音声などを聞く、②身の回りの事物や生き物に関する語彙を増やす、③子どもが興味をもちそうな話題や日常生活にかかわる出来事をやさしい英語で表現してみる、などが効果的です。

21

英語活動は、いつも外国語指導助手（ALT）とのTTで行う方がよいのですか。



児童の英語を学ぶ動機を高めたり、英語を用いた実際のコミュニケーションを体験させたりする上で、ALTとの連携を図ることはとても効果的です。しかし、英語活動の内容の選択や授業の進め方をALTに全面的に任せるとは決して望ましいことではありません。また、必ずしも毎時間、ALTに英語活動に参加してもらう必要もないでしょう。学校として、あるいは学級としてのねらいや指導方針を明確にして、必要に応じてALTの訪問を要請するようにしましょう。

22

どのような場面で、外国語指導助手（ALT）を迎えることが効果的ですか。



ALTを迎える場合の具体的なねらいとしては、①直接外国人と交流させる機会を体験させたい、②外国の文化に直接触れさせたり、日本の文化や習慣を紹介させたい、③英語の会話を中心とした活動に取り組みせたい、などが挙げられますが、それぞれのねらいに応じて、訪問の時期や回数が変わってきます。ALTのスケジュールの関係で、学校の希望どおりにはいかない場合もあるかもしれませんが、校内での学年間の調整や、中学校との相談などにより、訪問の日程などを工夫しましょう。

23

ALTとの効果的なTTを行うには、どのようなことに留意したらよいですか。



ALTとのTTを効果的なものにするには、ALTに授業のねらいや内容を理解してもらうための打合せ時間の確保が必要となります。しかし現実には、なかなか十分な時間の確保が難しい状況があります。

担任もALTも、打合せを重ねるうちにお互いに徐々に慣れてくる面もありますが、校内でよく協議しながら、①授業場面における担任とALTの役割を明確にする、②授業の共通する基本的なパターンを構築する、などの工夫を行うことによりスムーズに打合せを進めることができます。最初は校内の英語に堪能な教員や、校区内の中学校の英語教員に力を借りることになるかもしれませんが、基本的な約束事が明確になることで、ALTも安心して参加できるようになり、打合せ時間の短縮にもつながります。

24

地域人材との効果的なTTを行うには、どのようなことに留意したらよいですか。



ALTに限らず、英語が堪能であったり、海外在住経験があったりする地域住民が授業に参加してくれることは、学校にとってもありがたいことです。「学校支援センター」の機能を生かして、地域人材の協力を仰ぐ試みを実践している学校も増えてきています。この場合、他の教育活動への協力と同様、学校としての英語活動のねらいや指導計画をしっかりと説明し、授業における役割を明確にしていくことが大切です。また、来校していただく時間帯や担当時数などの負担等についても、事前に十分相談し、無理なく長続きできるスタイルを見いだしましょう。



☆英語活動の教材や指導方法等について☆

25 英語活動の教材はどのようなものを扱えばよいのですか。



英語活動にかかわる市販の教材も豊富になってきましたが、聞くことや話すことを中心とした活動を行う上では、音声のCDや映像のDVDなどの視聴覚教材も積極的に活用するとよいでしょう。文部科学省から配布される予定の「英語ノート（仮称）」には、音声教材のCDも用意されますので、併せて活用してください。市販の教材等を活用する場合には、児童、学校及び地域の実態を考慮して適切なものを選択することが大切です。

26 文部科学省が配布する予定の「英語ノート（仮称）」とはどのようなものですか。



すべての小学校で英語活動が実施されることを受けて、文部科学省では、第5・6学年の全児童と担当教員に、「英語ノート（仮称）」を配布する予定です。これは従来、英語活動をあまり実践してこなかった小学校においても、新学習指導要領に示された内容について、第5学年から無理なく取り組めるものとなることを想定して作られます。扱いについては「心のノート」と同様で、あくまでも補助教材ですので、各学校のこれまでの取組状況や児童の実態を考慮しながら、弾力的に活用することが可能ですが、同じ中学校区内の小学校における共通の学習体験を、中学校1年生の英語学習に生かす上でも、共通教材としての積極的な活用が望まれます。「英語ノート（仮称）」は、平成20年度当初にまず「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業拠点校」等での試用を経て、完成版が年度末までに全小学校に配布され、平成21年度から使用開始となる予定です。教員向けの指導資料や音声教材のCDも添付される予定です。

27 歌やチャンツ（注）を取り入れることは効果的なのですか。



やさしい英語の歌や、リズムカルなチャンツは、英語の音声に慣れ親しみ、児童の学ぶ意欲を高める上で効果的な教材です。チャンツは、テンポよく英語を聞いて、声に出して発声することで、正しいストレスとリズムが残っていきます。これを繰り返すことで、子どもは新しい表現に慣れ、やがて自分から使ってみようという思いをもつようになります。

授業に取り入れる際には、児童の様子を観察しながら、あまり複雑なものは避け、できるだけ単純なもの、児童が動作などを交えながら、繰り返し楽しく取り組めるものを選択しましょう。

（注）チャンツ…一定のリズムに乗せて、繰り返し何度も英語を聞いたり口ずさんだりすることができる教材

28 ジェスチャーなども取り上げることは効果的なのですか。



表情やジェスチャーなどの言葉によらないコミュニケーションの手段も、コミュニケーションを支えるものとして重要であることを踏まえ、適切な場面で取り上げ、その役割を理解させるようにしましょう。ALT等の協力により、日本と外国のジェスチャーの違いに気付かせることも効果的です。ただし、過度なオーバーアクションを児童に促すのはあまり好ましくありません。

29 アルファベットや文字の指導は必要でしょうか。



小学校英語活動では、基本的に音声面を中心とした活動が主になりますので、単語の綴り等を系統的に指導し、それらを用いて英文が書けるようになることを求める必要はありません。しかし、文字に対する児童の興味・関心が高く、文字学習への意欲が旺盛な場合には、負担加重にならないように十分配慮しながら、音声によるコミュニケーションを補助するものとして文字を用いることは差し支えないでしょう。アルファベットを簡単な活動や、歌・チャンツなどを利用しながら、無理なく楽しく学ばせている実践例もあります。

ただし、児童に新しい表現を学ばせる際に、単語や英文を先に提示して、それらを練習して覚えることを目的とした指導は避けたいものです。

30 せっかく英語を学習するので、単語や表現を覚えさせなくてよいのですか。



小学校の英語活動は、知識や技能を身に付けさせることを主な目的としてはいないので、児童に、英語の単語や表現の定着を強く求めないように注意しましょう。「英語は覚えるのが大変」、「英語は難しい」という意識が児童の中に膨らむことで、「英語嫌い」を生み出してしまふことは避けたいものです。

ただし、活動の目的を達成したり課題を解決したりするために、必要となる基本的な表現をしっかりと練習させることは、児童に自信をもって活動に取り組ませ、達成感や充実感を味わわせる上で大切なことです。負担加重にならないよう配慮しながら、楽しく効果的な練習方法を工夫しましょう。

体験的な活動の目的を達成することを目指しながら、繰り返し英語に慣れ親しむことを通して、児童は、結果として、用いた単語や表現を自然に覚えていくことが多いものです。しかし、たとえ忘れてしまっても、児童が自信を失ったり、気後れしたりしないような手だてを工夫していくことも大切です。

31

数時間単位の単元を構成して英語活動を実施することは効果的ですか。

A

児童にテーマ性のある課題を提示し、目的をもってその課題を追究させる活動を取り入れることは、主体的に学ぼうとする意欲を高めるとともに、目的の達成や課題解決のための手段として英語を用いることを体験させることができる点で効果的です。別に配布される「群馬県小学校英語活動モデル地域推進事業実践概要報告書」に、いくつかのモデル地域における具体的な実践も紹介されていますので、参考にしてください。

ただし、年間35時間の英語活動を、すべて課題解決型の単元で構成する必要はないでしょう。1～2時間で完結するような英語に楽しく触れる活動とのバランスを取りながら、児童や教員にとって無理のない年間指導計画を作成しましょう。

☆英語活動の評価について☆

32

英語活動の評価はどのように行うのですか。

A

小学校英語活動は、体験的な活動が中心となるため、当面は、英語に触れ、英語に慣れ親しむ体験的な目標を踏まえて評価するとよいでしょう。具体的には、「楽しくゲームや活動に参加している」、「積極的に英語を使って友達とかかわろうとしている」、「英語での話や説明をしっかりと聞き取ろうとしている」、「日本と外国の違いや共通点に興味をもっている」など、活動を通して表れる児童の姿を中心に評価し、まずクラス全体として、英語に触れる体験や、英語に慣れ親しむ体験ができたかどうかを振り返って授業を分析します。

33

個々の児童はどのように評価するのですか。

A

英語活動に参加できていない児童や、コミュニケーションを楽しめていない児童などがいないか、などを注意深く観察し、一人一人の活動が成立しているかどうかを評価しながら、その結果を指導に生かしましょう。

英語活動では、児童の知識や技能の到達状況を評価するものではないので、数値的な評価は求められていません。総合的な学習の時間と同様、個々の児童の活動の様子から、特徴的な事柄を文章で記録します。評価の観点としては、①コミュニケーションへの関心や意欲、②表現活動での積極性、③進んで理解しようとする態度、④言語や文化への興味・関心などが考えられます。

☆英語活動にかかわる教員の研修について☆

34

英語活動が必修化されるにあたって、教員の研修はどのように行われますか。

A

新学習指導要領に示された内容や方法等について、教員間での共通理解を深めることは、英語活動を適切に推進する上でとても重要です。群馬県教育委員会では、平成20年度から、総合教育センターの研修として、校内の英語活動を中心となって進める担当の教員が、全小学校から1名ずつ参加する「小学校英語活動中核教員研修」を4日間実施します。また、群馬大学や県立女子大学も、現職教員を対象とした小学校英語活動にかかわる公開講座や研修会の開催を予定しています。

35

英語活動にかかわる校内研修はどのように進めたらよいですか。

A

中核教員研修に参加した教員を中心として、研修用資料等を活用しながら、英語活動にかかわる校内研修を計画的に進めることが大切です。文部科学省では、平成22年度までに、各小学校のすべての教員が、主に校内研修において、1人当たり2カ年で計30時間程度の現職教員研修を実施することを想定しています。

また、教員自身が基本的な英語表現に慣れ親しむために、地域のALTや外部人材を交えて、日々の英語活動で役立つクラスルーム・イングリッシュ（教室英語）や、ALTとの打合せに役立つ英語表現などを学ぶ研修に取り組むことも効果的でしょう。

36

県内で、英語活動を積極的に実践している地区や小学校はありますか。

A

平成18～19年度の県の指定として、前橋市・玉村町・高崎市・太田市が、「小学校英語活動モデル地域推進事業」に取り組んできました。また、平成19～20年度は、文部科学省指定の「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」にかかわる県の拠点校として、前橋市立天川小学校、伊勢崎市立三郷小学校、高崎市立国府小学校、藤岡市立小野小学校、吉井町立南陽台小学校、長野原町立中央小学校、昭和村立東小学校、みどり市立大間々南小学校の8校が実践を進めており、群馬大学教育学部附属小学校も国の拠点校としての実践研究に取り組んでいます。その他の市町村や小学校でも、積極的に特色ある取組を進めているところもありますので、学校間の情報交換を密にし、それぞれの取組を参考にしながら、自校の英語活動の改善・充実に努めましょう。

☆中学校との連携や保護者への説明について☆

37

中学校との連携をどのように図っていったらよいですか。

A

中学校外国語科（英語）の新学習指導要領には、第1学年における言語活動の取扱いとして、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ、身近な言語の使用場面や言語の動きに配慮した言語活動を行わせること。（以下略）」とあり、小学校における英語活動との連携について示されました。このことから、今後は、各中学校が、校区内の各小学校でどのような英語活動が実践されているかという点に一層関心をもつようになるでしょう。自校の英語活動についてしっかりと説明できるようにしておくとともに、具体的な連携の手だてとして、小・中相互の授業参観を実施したり、児童・生徒が交流できる体験活動の機会を設定したりするなどの工夫をすることも効果的です。

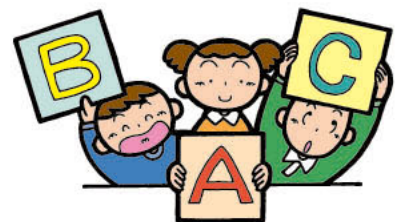
また、中学校の英語学習で、小学校英語活動で培われた素地を効果的に生かしていくためにも、中学校や、同じ中学校区内の他の小学校との協議や情報交換の機会を設けたり、可能な範囲で活動内容の共通化を図ったりしていくことも大切なことといえます。

38

小学校英語活動について、地域住民や保護者にどのように説明したらよいでしょうか。

A

小学校の英語活動は、英語がうまくなる、しゃべれるようになるという技能の習得を主な目的とするものではなく、英語に対する興味・関心をもたせ、英語を用いた様々な活動を通して、知らず知らずのうちに英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいく活動です。このことを、英語活動に生き生きと取り組む児童の具体的な姿などを例に出しながら、懇談の機会や通信等を通して積極的に説明しましょう。実際の授業を参観してもらう機会を設定することも大切です。



発行者

群馬県教育委員会（義務教育課）

〒371-8570 前橋市大手町1-1-1 TEL.027-226-4615